

Who was SAVE? 【完結】

Lesser

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本作のオリキャラを、スマホのアイビスペイントXで頑張ってみました

Was<sup>救</sup>されたのはASAVE<sup>たのは</sup>Asriel?<sup>A</sup> Or<sup>s</sup> Character?<sup>r i e l ?</sup> Maybe<sup>それとも</sup> ; ; ;<sup>そのまま</sup> ; ; ;<sup>さか</sup>

# 目次

第1話	Who was fallen	1
?	(誰が落ちた?)	—
第2話	A new family member (新しい家族の一員)	5
第3話	They are moving (みんなで引越し)	9
第4話	Planning filed (計画失敗)	14
第5話	Secret is uncovered (秘密が明かされる)	20
第6話	Bellis... (Bell は...)	27
第7話	The end? (終わってしまうの?)	33
第8話	True end (これで本当に終わり)	39
	裏設定とかいろいろ	46
	UNDERBELLY the another story	57
	RIDERTALE 予告	64
	プルット	69
	「*Do you take the TRUE RESET?」	73

M a r r y X , m a s !		100
n g t h e w o r l d : 		95
U n d e r S w a p !		「s w a p p i
A m a l g a m a t e s		91
l l ” ? }		87
t h e m e a n i n g o f ” B e		
S t o r y S h i f t }		W h a t
た く な い 人 は 見 な く て よ し		80
ほ ん と に ほ ん と の 作 者 さ ん の 独 り 言	(見	

# 第1話 Who was fallen? (誰が落ちた?)

『むかしむかし、ちきゆうにはニンゲンとモンスターというふたつのしゅぞくがいました』

『ところがあるとき、ふたつのしゅぞくのあいだにせんそうがおきました』

『そしてながいたたかいのすえにニンゲンがしょうりしました。ニンゲンはまほうのちからでモンスターたちをちかにとじこめました』

『それからさらにながいときがながれ……』

『今、”のぼつたらにどともどれない”エボット山はそのふういんのうえにあるとされている』

それは、今どきの子供であれば誰であれ知っているお伽話だ。

まあ、私の場合はよくあるように親から聞くわけではなく人づてに聞いたのだが。

ともかく、エボット山に登ったら戻つてこられないというのが重要なのだ。それ以外は特に重要なことじゃない。登ったら戻つてこないという事はきつとその山の中で死んだのだろう。つまり、エボット山には死ねるだけの何かがあるという事だ。

私はそれを求めてこれからエボット山に登る。当然、こんなことは誰にも言えない。……いや、言っても相手にされないと言った方がいいのか。アイツ一人だけはそれなりに考えてくれそうだが、それでも言う必要はない。

そう思つて飛び下りてから結構な時間がたった。私は今、詳しい経緯は私にもわからないがモンスター一家に引き取られた……いや、養子に取られたのか。

始めこそ死に損ねたことを嘆いていたが、今はそこで無理に死ぬことを選ばなくてよかったと思つている。そうしなかったから私は今こうして血のつながりはないが、幸せなモンスターの家族の一員として生活ができている。

この地下にいるモンスターは基本的にいいヤツしかいなかった。アイツから聞いたような戦争のことだつて引きずつているとは思えないほどだ。……いや、あの王様が根回ししたおかげで私のようなニンゲン相手でも取り繕つてくれるのだろうか。

けれど、すくなくとも目の前にいるこいつだけはニンゲンへの恐れなんて微塵もないのだろう。

「あれ? あそこにいるのつてもしかして……ニンゲン?」

だからすぐ隣からそんな声が聞こえてきたときにはとっさにそいつを庇い、目の前にいる倒れたニンゲンを警戒した。

そして私が警戒するのを待っていたかのようにして人間が体を起こす。そこにあったのはそれなりに見た顔だった。多少変わってはいるが、それでもほとんど変わっていない顔だった。

「う……ゴホツゲホツ。あ、生きてたんだ。よかった……」

「お前、なにしてるんだ」

自分が生きていることに心底安堵しているようなツイツに向けた言葉は冷たいものだった。やはり、私は未だにニンゲンへは憎悪を抱いているようだ。

まあ、それもそうか。ニンゲンがいたおかげで私はここにいるが、それで許せるほど甘くはないし、達観もしていない。

「あ！ Chara！ よかった、無事だったんだね……。なんでエボツト山に登ってるのさ！」 登ったら戻れない” ってボク言ったよね！」

「ねえChara、知り合い？」

最初は安心したように笑っていたが、途中から半ば怒るようによくし立てられ、後ろからは少し怯えた様子で質問が飛んでくる。まあ、やはり私の知っているアイツだったようだ。心配して損した。

けれどなんでこいつがここにいるんだ。私じゃあるまいし、こいつがここに来るような理由なんて何一つあるはずがないのだが。

「とりあえずお前は どうしてここにいるんだ」

「……落ちて来たんだよ。Charaを探して」

そう言われてから、そいつは二つと歯を見せて笑う。今気づいたが目には軽くクマがあるところを見るに相当真剣に探していたようだ。すでに数か月は経過しているというのに。それだけたつたら私のような子供は死んでいると考えるべきだろう。というか、アソコのニンゲンならみんな私がいなくなつたくらいでは何も思わないはずだ。

本当に、こいつだけが例外なんだ。アソコで私にまともに話しかけてくるのはこいつだけだったし、きつと後ろにかばっているAsくらい考えなしだったのだ。こいつは。

「とりあえずAs、そのニンはBell。逆にこっちはAstridだ」

一先ず簡単に互いを紹介してから…そうだな。やっぱリマ…Torieにも言わないといけないだろうな。

私を探して落ちてきたニンゲンまで増えるなんて、いよいよもつてHomeが手狭になるな。



## 第2話 A new family member (新しい家族の一員)

私がBellをマ：Torielに紹介してからさらにいくらか時間が過ぎた。気が付けばBellは持ち前のコミュニケーション能力でいつの間にかモンスターたちとも仲良くなっていた。

この間もパ：Asgoreとよく話している研究者と話をしていた。あいつは地上にいたところから頭の回る奴だったから気に入られたのかもしれない。それともただの研究対象として見られているのかだが。

だが、モンスターたちとの遊びをしていて魔力弾まで出てきたときにはさすがに肝を冷やした。どういう言うわけかあいつはひらひらと躲していたが、それでもいい心地ではなかった。その後マ：Torielに怒られたのは私の告げ口ではない。  
ないのだ。

「それで、今日はどうするの？」

「ああ、パ：Asgore王に私たちで作ったパイを食べてもらうんだ」

「ちゃんとママからレシピ貰ったんだよ！」

それはいいねと新しく私たち Dreamurr 家に加わった Bell 改め Bell Dreamurr は答える。

それから私たちは他愛のない話をしながら材料を求めて歩き続ける。基本的な材料はすでに揃っているの、後はレシピにある金色の花を手に入れればいいのだが、中々見当たらないのだ。

金色、というくらいだからすぐ見つかると思ってマ：Torieil にも生えている場所を聞いてこなかったのは失敗だったらしい。こんなことなら As に流されることなぐちやんと聞いておくべきだったな。

「花、つてことなら多分日の当たるところじゃないか？」

「太陽か……」

「あー、そういえば Chara と Bell の落ちてきたところに花が生えてなかった？」

「あー、生えてた」

なぜだか声が重なってしまい、それを見て As がクスクスと笑う。私は笑っている As を小突くが、それを見て今度は Bell が笑いだす。

このまま Bell を小突いたら今度はまた As が笑うのだろうと私は仕方なく拳を収め、記憶をたどって落ちてきた場所へと向かう。だがその途中でパ：Asgore の

育てているのと同じ形をした金色の花を見つけた。

「As、Bell。あれかな？」

「あれってパパが育ててるやつだよね」

「食べれるから育ててたんだ」

私たちはBellの食べられるから育てたという言葉に納得し、深く考えずにその花を持ってきたナイフでいくつか刈り取ってHomeに帰ることにした。

ちなみに私は装備としてナイフを選んだが、Asは木の棒（お気に入りらしい）をBellは地上の家から持ってきたらしい鞆を持ってきていた。Bellのバッグに詰められていたチョコレートで雪崩を起こした時は大喜びしたものだ。すぐ後にマ：Torrieに隠されて管理されてしまったが、毎日チョコレートを食べられる生活は至福の期間だった。

そしてHomeに帰った私たちは早速調理に取り掛かり、パイを作ったのだが、あのパ：Asgoreの育てていた花にはどうやら毒があったようでパ：Asgoreが数日ほど寝込み、私たちはマ：Torrieに盛大に叱られることになった。

しかし、今回のことでこの今のHomeでは手狭になってしまっているとマ：Torrieとパ：Asgoreの中で話し合いがあったらしく、今度はNewHomeと言えるところに引越すことになった。

なんでも基本的なつくりは一緒らしいが、一部屋一部屋が広くなっているらしい。個人的には今のこのHomeが気に入っているからそれはありがたかった。

Homeの地下から通路を通ってSnowdinに出て、Waterfall、Hottlandと続いてNewHomeに向けて歩く。その道中で興味深い石碑を見つけたのでメモを取ったりしながら私たちはNewHomeを目指した。

——ニンゲンのような強いソウルがあればモンスターは底知れぬ力を得られる。

きつと、人間のソウルがいくらかあれば結界すらも破壊できるのだろう。つまり、ここにいるモンスターたちを地上に出すことができる。こんな薄暗い地下でなく、日の当たる暖かい空の下で暮らすことができる。そうだ。そうなたほうがいいんだ。

だって、こんなにも優しい彼らがこの狭苦しい地下で暮らして、彼らよりもずっと狡猾で残酷なニンゲンが日の下にいるというのはおかしいだろう。

本当なら逆であるべきなのだ。逆であれば、きつと世界はもつと平和になる。きつと、今のニンゲンたちが起こしているような戦争もなくすことができるだろう。

……幸い、ニンゲンのソウルはある。あとはこれをどうやって取り出すのか、どれだけ必要なのか……それと誰に渡すのかも考えないといけないな。

これからはそれなりに忙しくなりそうだ。

### 第3話 They are moving (みんなで引越し)

私がああ戦争碑を見てからそれとなく行動を始めた。勉強に興味を示したフリをしてW・D・Gaster:あのBellやP:Asgore王と話しているアイツに付きまとい、純粹に疑問に思ったようにしてこの地下世界にあるバリアの強度を知りたいなどと聞いた。

そしてそれを壊せるだけのエネルギーはあるのかとも。結論として、W・D・Gasterはそれなりに乗り気になって調べ始めた。乗り気になるのが早かったから聞いてみたらBellも似たような質問をしてきたらしい。

詳しく聞いてみたら大体『今のニンゲンは魔法を使えないのになんでバリアが張れたのか』だそう。それでW・D・Gasterはバリアを構成するエネルギーについて調べ始めていたらしい。私とは少し毛色が違うが、似たような質問だったから片手間でなくちゃんと調べてみようとのことだ。

けれど、考えてみれば確かにBellの質問も気になる。魔法の力で結界を張ったのならなぜ今のニンゲンに魔法が使えないのだろうか。M:Torieilのようにコ

ン口を使わず魔法の火で料理をして明かりをともし…そういうことが誰でもできるのなら当たり前のように今でも魔法が使われているはずだ。

それだというのに今のニンゲンは魔法を使えない……。使えるニンゲンと使えないニンゲンがいて力が薄くなったのか？ いや、だとしても戦力を落とすようなことは普通しないだろう。結界を張ったのはニンゲンじゃない？ いや、それこそあり得ないか。

この辺りは長く生きているらしいパ：A s g o r e 王にでもそれとなく聞いておけば解決するだろうか。あの性格だから強情に聞こうとしたら答えてくれるとは思うのだが。

A s は聞いていたり…：しないだろうな。していたら多分私に言いに来るだろう。

「それで、研究はどうなってる？」

「ああ、それなら大まかな結論は出たよ」

今は勉強と称してW. D. G a s t e r の研究所で話を聞いていたのだが、もうすでに結論までたどり着いたらしい。私と入れ違いになつたらしいB e e l i e の質問はまだらしいが。

わかったことは二つ。一つはニンゲンのような強いエネルギーを秘めるソウルが7つもあればバリアを完全に破壊できること。ただしただ抜け出るだけならば一対一で

いいらしい。

しかし地下世界にいるモンスターは結構な数だ。それだけのソウルを集めるよりは誰かが外に出て7つ集めた方が楽だろう。

「Gaster博士はやってみる気は」

「ないね」

「……だよな」

わかっただよな、この男は本当に自分の興味があることにしかやる気を出さないらしい。いまではニンゲンのソウルに秘められたエネルギーが何かを研究しているらしいが。

……まさか、私やBeelを使つての実験とか考えていないだろうな。もしもそうだったら私は有能な研究者のツテを一つ失うことになる。

しかし、W. D. Gasterでダメとなれば私の友好関係からして大分選択肢は絞られるな。パパやママはだめだろう。Asはそもそも論外だしな。一体どうしようか。いや、まずもってニンゲンのソウルをどう渡すかだよな。まさか殺させるわけにはいかないから偶然を装わないといけない。

偶然…病気とかだろうか。しかしこの地下世界で大分暮らしてきたが病気なんてしたことがないぞ。そもそもママが病気になるような生活を許さないだろう。病気…な

にか菌でもあれば起こせるのだろうか何かないか…。

「……………金色の花」

そうだ。あれがあつた。あの花を食べたパパが大分弱つたんだ。モンスターよりも弱い私たちニンゲンだったら…それも子供ならすぐにでも死ぬことになるだろう。後はソウルを取り込んでくれる協力者だな。

私にもBeelのようなコミュニケーション能力があればすぐに候補が上がつたのだから、そんなことを嘆いている間はない。できることならばすぐに彼らを外に出さなければ。

一人外に出して外でソウルをいくつか見繕つて手に入れ、そしてバリアを破壊する。そうすれば彼らは外で暮らすことができる。

「」  
誰かが話しかけているようだが、今はそんな余裕はない。思考を回せ。考えろ。どうすればいいのかを。

「rra! Charra!」

ふと、耳元で自分の名前を呼ばれていることに気づいて顔を上げる。それで見えたの



はB e e lの銀色に輝く瞳だった。

その近さに驚いて跳び退くが、跳んだ先でW. D. G a s t e rと話していたA sにぶつかると。そのままバランスを崩してA sを下敷きにして転んでしまう。踏んだり蹴ったりだ…なんて思いながら起き上がり、A sに手を伸ばす。

A sに私の手を取らせてからグツと引つ張り上げる。どうやら思考に集中しすぎて二人が来たことにも気づけなかったらしい。心なしか疲れが増している気もする。

こんな時にはチヨコレートを食べたいが…：そういうわけにもいかないのだろうか。そうおもって吐いたため息をどうとらえたのか、B e e lはポケットからアメを取り出して私に差し出してくれる。

「はいコレ。ボクが貰ったんだけど…ちよつと今日は食欲がなくてさ」

「……」

なんとなく向けてくる笑顔が見れなくなつてそのアメを無言で受け取つて口に放り込む。不思議な味だが、マズくはない。

## 第4話 Planning filed (計画失敗)

あれから、またしばらく経った。結局のところ協力者として挙げられるのはAsrielしかないなかった。私の友好関係の狭さが実に憎たらしい。

そして次にあの金色の花を取りに行くまでがとてつもなく長かった。

そもそもあの花はHome近くに生えていたのだ。それを取りに行くためにまたHotland、Waterfall、Snowdinと歩き続けなくてはならなかった。Waterfallを抜けると急に寒さが来るのでそこはあらかじめ着込んでいくことにしたがそうしたら今度はHotlandが辛かった。途中でバッグ抱えて寝て休んでいるしているBellとすれ違ったが、ともに話している余裕はなかった。寝苦しそうだったが、地面が石のところまで寝るからだ。

「やつと着いた……」

パ：Asgore王の庭園から取ってもいいが、何となくそれは嫌だった。だからこうして取りに来たんだ。

刈り取ったそれをポケットに入れて来た道を引き返す。ブンブンと手に持ったナイフを空振りさせるほどに気分は高揚していた。

そんな気分は Hotland ですぐに萎んでしまったのだが。Beil の奴はまだ寝ていた。

---

あれからより計画を念密にして、ようやく実行しようとした時だった。口に入れようとした金色の花を Beil の奴が奪ったのだ。

「ダメだよ Chara。この花には毒があるんだ」

「知ってる」

「……Asriel、なんで止めなかったのさ」

「もう何回も言ったけど、Chara は変わらなかったから……」

私への説教は態度からしてか早々に諦め、今度は As に質問をする。けれど帰ってきたのは流されやすい Asらしい答え。それを聞いて Beil はため息を吐いてから再度顔をこちらへ向ける。

きつと、私へ雷が落ちるのだろうか。もしかしたらママにも言われて計画が頓挫するかもしれない。それは避けたいが……。Beil の回避能力は相当だ。捕まえるのは相当な苦勞をすることになるだろう。

「なんで、そんなことをしようと思ったの？」

「……………え」

「B e e l ……止めないの?」

私は怒られるとばかり思っていた。だからB e e lから理由を聞く質問が飛んできたときには思わず呆けた声を出してしまった。

変わりというようにA sが聞くけど、それにB e e lは何となく困ったように笑いながら私の頭に手を乗せる。

「C h a r aのケツイの硬さはよく知ってるんだよ」

顔を見なくてもわかる。今のこいつはきつと笑っている。それもさっきの困った笑いじゃなくてきつと昔を思い出すような笑い方だ。

実際、何度か見たことはあった。A sにせがまれて地上の話をするときは決まってそんな顔をしていた。

前に見た光景を思い出して、もう見れないことを理解していて。そんな楽しいけれど悲しい、微妙な顔だ。そんな顔は、あんまり好きじゃなかった。

「地上じゃあC h a r aってばボクが食べ物渡そうとしてもチョコレート以外受け取ってくれないんだもの」

「キミから施しを受けるほど弱くなかったから——」

「そんな意地っ張り相手にそれなりに一緒だったからね。C h a r aが本気でやってる

のかくらいはわかるよ」

私の言葉をまるつきり無視してBeelは話を続ける。何度か抗議の声を上げるがそれでもBeelは止まらなかつた。

そしてAsは私の昔話が聞けて辱めを受けている私の様子を見て楽しさと恐ろしさが半々といった様子だが、好奇心が勝るようで止めることはない。

「わかつた、話すからもうやめて」

「そうこなくっちゃ」

AsはBeelの作戦に気が付いていなかったのか、驚いたような声を上げていたが意趣返しにそのAsの声を無視して事の経緯を話し始める。

そして一通り話し終えたところでBeelから一言。

「まあ、そんなことだろうと思つてた」

「ええっ!? Beel知つてたの?」

まあCharaがWaterfallでメモ取ってるの見てたしとBeelは話す。確かに私はBeelの目の前でメモを取っていたのだったか。これは失敗だったかもしれない。

いや、もしかしたら私と同じようにW. D. Gasterに頼んだ内容を聞いたのかもしれない。……いや、目の前のこいつにそこまでの思考はないはずだしあるとしたら

Gasterの余計なお世話か。

「で、自分のソウルを使って結界を……ねえ」

スツとBeelは目を細めて私を睨む。AsはようやくBeelが本気で怒っていることに気が付いたのかオロオロとし始めた。しかしBeelが怒っているのはわかっていたが、まさか冷静に怒るタイプだとは思わなかった。Beelは賢いが情に厚いし、てつきり激情に駆られて怒鳴ると思っていたのだけけれど。

結果として私はBeelにこつてりと絞られることになった。大まかな内容としてはどうして自分にも言わなかったのかという事だったが。

言ったところで止められるのが目に見えている上に説得も手間がかかりそうな相手だったんだ。話さないのは当たり前だろうと言ったせいでさらに説教が伸びた。

「これは没収するからね。Asgore王にも言つて二人が手に入れられないようにするから」

「チツ、また探し直しか」

「ちよつとCharra!」

思わず零した舌打ちを拾われたせいでBeelの睨みがより強くなる。だがそれでも私は引くわけにはいかないんだ。ここにいる皆を地上に出すために、私は止まれな

「Chara。キミが死んだらボクもAsrielも…TorielもAsgore王も悲しむんだ。絶対に止めてくれ…頼むから」

最後にそう付け加えてからBeilは出ていった。けれど次の方法を考え始めた私には聞こえていなかった。聞いていれば、あんなことにはならなかったのかもしれない。

## 第5話 Secret is uncovered (秘密が明かされる)

私が新しい方法を考え始めてからというもの、Gasterとの勉強会へ行ける頻度が減り、パ：Asgore王の庭園へ行くにも必ずBell達の監視が着くようになった。

夜中に行こうとしても王国騎士団に話を通されるといって徹底ぶりだ。これではいいよもって毒という手段が使えなくなるかもしれない。

そう思って焦り始めてから、私は少しずつこうなつた原因であるBellに強く当たるようになっていた。

すれ違つても話しかけられても何も返さず、Asと二人きりで遊ぶようになった。Bellはそんな私の行動を見るたびに仕方がないとでも言いたげに笑って、離れていくようになっていた。

Asは私たちのそんなやり取りを見ていてどうにかしようとしていたらしいが、実を結んだことは一度もない。

なのに、今日はなぜだかBellに直接呼ばれて私はBellと二人きりで話すこと



になつてしまった。

これまでずっと避けてきた相手と真正面から向き合つて話をするという事に少し緊張のようなものを……いや、私はこいつに怒っているんだ。緊張なんてしていない。

「それで、話つて何」

どうにか切り出したのはそんなぶつきらぼうな言葉だった。

けどBeelはそんな私の態度を何とも思つていないようで、一切反応せずに答えてくれた。

「計画を諦めるつもりはないんだよね」

答えというよりは、質問に質問を重ねるだけだが、私にとっては答えだった。こいつはよりもよつて私に計画を諦めるように説得に來たのだ。

「ない。絶対に止めない」

だから私はそう即答した。なんなら考えるよりも先に言葉が出ていた。それを聞いてBeelは一度目を瞑り、そしてもう一度開いた。

「ニンゲンのソウルを手に入れるために……Chara自身のソウルを使ってAsri e lを外に出すの？」

「そうだよ」

そつか……とBeelはどこか遠くを見るようにしながらも答える。

そして、さつきよりも覚悟：Beer風に言えばケツイの固まった目で私にまた質問を始める。

「必要なのはニンゲンのソウル一つだけなんだよね」

「そうだよ」

「ボクがああの際に言ったことは覚えてる？」

「覚えてる」

「ニンゲンのソウルなら、誰のでもいいんでしょ」

「うん」

そんな問答に私はイライラを募らせていた。確信を突かない回りくどい質問に私は飽き飽きしていた。

だからBeerに聞いたんだ。

「何が言いたいのか？」

って。そう言ったらBeerは少しの間考えるように動きを止めてからもう一度口を開いた。けれど今度は下を向いていた。

「Chara。お願いがある」

「……………何」

なんとなく、聞いちゃいけないって思った。けどここまで来て引き返すわけにもいか

なくって私は聞いた。

聞いて、しまった。

「ボクのソウルを使つて欲しい」

きつと、私はその瞬間に相当間抜けな顔をしていたことだろう。自分でもそんなことが分かるくらいに私は放心していた。

「なんでそんなこと言うのさ」

「ボクは……Charaを助けるためにここに来たんだよ」

ああ、確かに地下で最初にあつた時はそう言っていた。

「けど、ここでの暮らしにCharaは満足してた」

そうだ。確かに私はここにいるみんなと過ごしていたい。

「それで、Charaが皆を外に出したっていうのなら」

……。

「ボクが、協力するから。だからCharaはみんなと笑い合つて、時々喧嘩したりして、幸せに暮らすべきだ」

……。

「Charaは地上にいい思い出はないだろう？ だから、地上にはボクが行くよ」

……。

「Asriellにだってニンゲンを殺させたりなんてしない」

……………。

「大丈夫、Gaster博士に話は着けてあるんだ。ボクを好きにしているから、代わりにボクのお願いを叶えてって」

……………ッ。

「Gaster博士が今ニンゲンのソウルについて調べようとしているのは知ってるでしょ？ それにボクを使っているからって」

……………やめてくれ。

「Charaを助けるためにボクはここに来たんだ。だからChara」

……………やめてよ。

「ボクに」

いやだ。

「救われて？」

「やだ」

そう口に出せばBellは困ったように笑う。その顔は地下でもう随分と見ていたものだ。

「じゃあ、諦めてくれる？」

「……」

何も言わない代わりに首を横に振ってこたえる。

「じゃあ、ボクを使ってよ」

「……！」

もう一度、今度はより激しく首を振る。

地上で話しかけてくれるのはB e e l l だけだった。地上で私のことを見てくれたのはB e e l l だけだったんだ。

A s やパパ、ママは大事だけど、同じくらいB e e l l も大切なんだ。だから、ダメ。そんなことはさせない。させられない。

「……、ゴホツゴホツ」

「B e e l l ……?」

「ああ、ごめん。もともと体は強くななくてさ」

A ハハとB e e l l はまた困ったように力なく笑う。確かにB e e l l は冬の間は私のところに来なかつたし、それ以外でも来ない時があつた。

体が弱いのはきつと本当だろう。この地下に来てからも誘いに乗らない日は少しだけどあつた。……私が一人で金色の花を取りにいった時も、確か普段ならそんなことしないはずなのに地面で寝ていた。

けど、それがどうだっというんだ。

「地上に、いた時からさ。大人になる前に死ぬって、言われてたんだ」

「え……？」

「Asriel 達には話せてないんだけど…Gaster 博士には言ってる」

待つて。何を言っているの？ 何を言うつもりなの？

「ボクが死んだら、Gaster 博士はボクのお願いのためにニンゲンのソウルを研究してくれる。…：博士は、絶対に約束を破らないからさ、その時まで待つてよ」

私を見る Beel の瞳は微かに揺れていた。

## 第6話 Bell is… (Bellは…)

Bellの告白を聞いてから私は否応なしにBellのことを意識することになった。

私と一対一で話してから当たり前だがBellはさらに弱っているらしい。少なくともAsに弱みを見せることはないが、それでも事実を知っている身からしたらどうしてもわかってしまう。

ふとした時に倒れそうになっていることがあるし、最近では食べる量も減っているように思う。

「う……」

なんとなしに気晴らしに外に出てみても目の前で壁に体を預けている姿を見ることになった。今もBellは目の前にいる私にも気づかないで荒い息を繰り返している。

「Bell……」

私から思わず零れた声を拾ったのか、Bellが私の方を見上げるがその目は前に見た時以上に揺れている。まるで、何を見ているのかわかっていないかのようだ。

「ああ、Chara。どうしたの？ こんなところで」

こんなところ、というのとはここが Waterfallの滝に隠された小部屋だからだろうか。その体じゃあ Hotlandすら苦痛であるはずなのに、一人でここまで来たのだろう。

私はともかく、Asはこの場所まで中々来ない。そして今Bellがいるところには不自然に赤いなにかが床にへばりついている。

よくよく見てみればBellの口元も少し赤くなっている。口を切ったのか、はたまた血を吐いたのか。その二択の答えはわからないがすでに体は限界に近そうだ。

『ボクが死んだら、Gaster博士はボクのお願いのためにニンゲンのソウルを研究してくれる』

Bellの言葉が思い出されて思わず顔をしかめる。W. D. Gaster……あまり、信用できていない。研究をすることとバリアを潜り抜け、人間のソウルを集めることは別だ。きっとBellは藁にも縋る思いだったから気づかなかっただろうが、私は気づいている。

言うべきだろうか。言ったところで、どうにかなるのか？ 言ったらBellは死ななくなるのか？ そんなはずはない。だからこそBellのソウルを使うことが最も合理的だと考えている自分がある。

そして、そんなことを考える自分に反吐が出る。



「……………」

「安心、してよ。Gaster博士には、ちゃんと外に出て、ニンゲンの、ソウルを集めて、バリアを壊す、っていつてた…だから」

もう長いこと話すこともできないのか、セリフは途切れ途切れだった。

私は、どうすればいい。そう考え始めるがどうすることもできないことを悟っている私には何もできない。

「大丈夫だよ、Chara」

私の心でも読んだみたいになBellが優しく話しかける。

「ボクは、ちゃんと、そこにいる」

そう言って遅々と持ち上げられた腕で指されたのは私の胸。そこに飾られた私とAs、Bell、ママ、パパで撮った写真が入っているハートのロケット。

Bellも、Asも同じものを身に着けている。言ってしまうと血のつながりのない私たちの絆の象徴。つながりを示すそれ。

「Bell……」

「フフ……ああ、ごめん。そろそろ帰ろうか」

Bellは柔らかく笑ってからどうにか立ち上がって壁に手を突きながら歩き始める。見ていられなくて肩を貸して、また歩き始める。

「ありがとう、Chara。やっぱり、君は優しいよ…」

言わなくてもいいことを話しながらBellは歩く。その歩幅は年下の私よりも小さなものだ。

それに合わせて歩くものだから普段よりも早く出たのに、普段帰るのと同じような時間になってしまった。途中何度か倒れかけていたのでBell一人だけならきつとこれよりも遅れていたのだろう。

「ねえ、Bell……」

死なないで。多分、私はそう続けようとした。けれどその言葉は声にはならなかった。

「あ、Charaお帰り！ ってBell、どこか怪我でもしたの…？」

「ああ、さっきまで寝てたせいでまだ眠くって……」

さも本当にさっきまで寝てましたと言わんばかりにBellは自分の目をこする。声色だつて普段となにも変わっていない。

変わっていないのだ。瞳以外、何も。変わっていないように見せられている。きつと話すまで私にもそうやって偽っていたのだろう。

Asも家族なのだから、パパやママだつて悲しむから。そう言ったらBellは彼らに話してくれるだろうか。言ったところで彼らは反対して、Bellのソウルを誰にも

渡さないように保管することになるだろう。

きつと、B e e l i e の遺体もずつと近くに置こうとする。A s は毎日のように眠っているB e e l i e のところに通うのだろう。パパはあの金色の花を眠るB e e l i e の周りに咲かせるかもしれない。ママは……きつと、眠り続けるB e e l i e に話しかけて、バタースコッチシナモンパイをB e e l i e に渡す。

私は、どうするだろうか。

私は多分……B e e l i e のソウルを――

「C h a r a ? ボーつとしてどうしたの?」

「……何でもない。B e e l i e を運ぶのに少し疲れただけ」

「じゃあB e e l i e は僕が支えるからC h a r a は休む?」

A s は、本当に優しい。B e e l i e は私に対して優しいと言ったが、優しい奴は間違っても親友のソウルを使うなんて考えないだろう。

……やっぱり、私は優しくなんてない。むしろ最低な部類だ。地上にいるニンゲンと変わらない……。

「C h a r a 。それは、違う」

「……………」

B e e l i e はもうロクに見えてもいないだろう瞳で私を見ながら告げる。

けれどその言葉も私は信用できない。ほら、やっぱり私は最低な奴じゃないか。

## 第7話 The end? (終わってしまったの?)

Beelの病気がついに家族のみんなにも気づかれた。Beelが倒れたところにパパとママが居合わせたのだ。

当然そこに私もいたが、誤魔化すよりも先にママがBeelの症状に気が付いた。

そしてその場にいなかったAsも倒れる音を聞きつけてやってきて、ママからの説明を受けて知った。

「どうということなの……」

「なんで、あの子が……」

「僕、Beelと遊んでたのに気づかなかった……」

「……………」

順にママ、パパ、Asの発言だ。私は無言を貫いた。

口を開いたら、私は全部を話してしまいそうだった。Beelに聞いたことを全部。ソウルを使った計画のことまで全部。

それを言ってしまったら二度と彼らを地上に送るチャンスがないことをわかっているから何も言えなくて、でも言ってしまうたくて。

私は初めて心の底から B e e l i e を恨んだ。こんなことならば知りたくなかった。知らなかったら私はこんな気持ちにならなくてすんでいたのだ。

知らなかったら、私は B e e l i e のソウルを使うなんて思いつかなくて済んだのに。

「ねえ、C h a r a は大丈夫なんだよね…?」

もし地下にきたニンゲン全員が B e e l i e のようになるとしたら、そんなことを考えている心底不安げな顔で A s が私に問いかける。

私はやはり無言で頷くだけにして答えた。

その後訪れた重い沈黙に私は耐えられなくなつて、口を開こうとした時だった。

「ボクも、大丈夫、だよ」

明らかに回復していないだろう体を壁に支えてもらいながら B e e l i e が部屋に入ってきたのだ。

どうにかして普段通りに立つて笑おうとしている姿を見たけれど、見ていられなくつて私は服を掴む自分の手を見た。

ママは立ち上がつて B e e l i e に抱き着いたようだ。B e e l i e のいたあたりから声を抑えて泣く声が聞こえる。

A s も、パパもそれに習つて B e e l i e を抱きしめたのか近くにあつた気配がすべて遠ざかる。

それがまるで私の未来を言い当てているかのように思えて、けれど私は動けないでいた。

「Charra」

たったの一言、Beelに名前を呼ばれて少しずつ顔を上げる。Beelは優しく笑っていた。そうして、私に手を差し伸べていた。

私はその手を取ってBeelを引き寄せる。As達には聞こえないように小声で文句を言い続けた。

どれだけ強い言葉で罵つてもBeelは私の背を優しく叩いてくれていた。まるで子供をあやすみたいなことだったけど、私はそれを続けられるうちに勢いを失ってしまった。

そして言葉が無くなったとわかると今度はBeelは私の頭を撫でてくる。ママが私にしてくれているみたいに。

「Beelのバカ……」

どうにか、泣きそうになりながらもそれだけは言えた。本当にBeelはバカだ。計画を私に話したらどうなるのかを知っているくせに話したり。

こうして、自分のソウルを利用する奴に優しくしているんだから。本当に、Beelはバカだ。

けれど私はこうしてそのバカにいいように扱われている。本当なら私はカンカンに怒っていたはずだ。けれど今私の心の中にあるのはどうしようもない混ざり合った感情だった。

さつきから、Beerleyの手は滑り落ちるみたいに私の髪を撫でては重りでもつけてるみたいにゆつくりと上がって、また落ちるように撫でるを繰り返している。

この行動すら負担にしかならないのだ。けれどそんな行為を私にしてくれているという事が嬉しい。けれどこれも近いうちに無くなってしまおうという悲しさがある。

なんでこんなことをしたんだって言う怒りもある。Beerleyと一緒に居られて楽しかった思い出が駆け巡っている。

全部が全部混ざり合って、でも混ざり切らずにそれぞれが主張して。私の心はかき乱されている。他の誰でもない、Beerleyに。

「ホントに、バカ……」

ついに腕が持ち上がらなくなったのかBeerleyはもう撫でてくれない。体を預けるみたいに私に体重が少しずつかかっている。

私だけじゃ支えきれない。けどAs、ママ、パパもBeerleyを支えてくれる。ついに体を全部預けられてから少しの間そのまま固まっていた。

そしてBeerleyの入ってきた扉からまた別のモンスターが現れる。



W・D・Gaster：Bellの協力者だ。けれど、私はこいつにBellを渡したくない。Bellのソウルをこんなよく知らない奴に渡したくなんてない。

けど、それがBellの望みだったから。仕方なくW・D・GasterがBellのソウルを見ることを許した。

Asも、ママもパパも無言でそれを見つめていた。きっと、初めて見るのだろうニゲンのソウル。

キラキラと光を受けて七色に色を変える透明なソウル。Bellの純粹さを表してみたいで、本当にきれいだった。

「…………。出直すとしよう」

それだけポツリと残してW・D・Gasterは立ち去った。ママとパパはBellの体をよく腰かけていた木のそばで眠らせてあげようと提案して、AsがBellを埋めることに反対した。

私は、Bellのソウルを胸に抱えながら動くことができなかつた。動きたくなかつた。動かなかつたら時間も動かないと信じて、動くことをしたくなかつた。けれど現実はいっだって非常だ。

「Chara。Bellのソウルもちゃんと一緒にしてあげよう」

「……………うん」

すごく、すごく長い間答えることを考えなかった。けど答えなきやいけなくてちゃんと答えた。Beelのソウル。透明で、七色に輝くソウル。

それは、とつてもきれいだっただ。そんなきれいなソウルをBeelの胸に抱えさせてから棺桶に入れて、埋める。

けれど夜が明ける頃にはBeelの胸にはハートのロケットだけしか残されていないかった。

## 第8話 True end (これで本当に終わり)

「\*I am filled with Determination.」

ボクは死んだ。ボクの望む形で。

そして死んだボクのソウルはGaster博士に好きにしていって言うてある。そもそも、ボクはバリアを壊すつもりなんてないんだ。

ただ、Charaに幸せに生きていて欲しかっただけ。だからCharaのソウルを使わせないためにボクのソウルを使ったフリをして、足りないことを演出してもらった。

さらに研究の為に使ってニンゲンのソウルにあるエネルギーもなくなったことにしてしまえば地下世界にあるソウルはCharaの持っている一つだけになって、地上へ出ることができないってことになる。

「つまるどころ、ボクはただCharaに地下世界にいて欲しかったのさ」

CharaはAsrielとTorielとAsgoreというDreamer一家の中で幸せにその生を謳歌しました。この物語の終わりはそれでいいんだ。

それだけでできていればいい。その中にボクは必要ない。

「そもそも、ボクは異分子だからね。大方、これを見ている君たちの願いによつて生まれ  
た：つてところかな」

そして、その願いをこの物語の書き手が組み上げて、Playerとして持っている  
Charaへの縁<sup>※</sup>を使つて、さらに観測を安定化させるための楔としてボクを打ち込  
だ。とはいえ、縁<sup>※</sup>をたどる以上Chara視点でしか見れていなかったようだけれど。  
それも、ボクが近くにいる間つて言う限定的な状況だけ。それだけ限定的だったか  
ら、どうにか異分子<sup>ボク</sup>を打ち込むことはできた。

しかし世界は異分子を排除しようとする。その結果がボクの病弱。

「もつとも、Gaster博士に頼んだ毒薬を飲んで死を加速させたのはボクだけどね」  
ボクを地上に戻そうとするためにCharaが想像以上に早くGaster博士  
を訪ねていた事を知った時は冷や汗をかいたよ。

そんな感じで紆余曲折あつたが、ボクは計画をちゃんと実行できた。Charaの計  
画を挫折させるという計画を。そして君たちはボクという楔を失つたからもうCha  
raを覗けない。

当然だろう。キミたちみたいな最低な存在がCharaを覗くなんて許されないん  
だから。

「楔を再び打ち込もうとしても無駄さ。あのtime<sup>世</sup>line<sup>界</sup>はすでに対策を立てた」

だから、今更楔を作っても無駄だって言葉を重ねる。

「Charaは穏やかな生活を得られた。Asrielの親友は死ななかつた。Asgoreは人を殺す選択をしなくてよくなった。Torielは心を痛ませなくともよくなった」

Charaが活着している間にニンゲンが落ちてくることはないから、Charaのソウルと合わせてバリアを通り抜けるなんてことにはならない。ソウルを使わないからCharaは死なない。

そしてCharaが死なないからAsgoreとTorielは落ちてくるニンゲンを見守る選択をできる。

「そして、Gaster博士はニンゲンのケツイを研究できる。……もつとも、楔であるボクのソウルにケツイがあるのかはわからないけれど」

他のモンスターたちには悪いけれど、外には出すことができなかもしれない。けれど、それでいいんだ。

確かに地上に出られれば彼らは本当の自由を得られるかもしれない。けれどそこには常に悪意がある。ニンゲンは違いを許容できない。

だから……もしかしたらまた戦争が起きるかもしれない。今度こそモンスターが根絶やしにされるかもしれない。けれど、地下に居ればそれはない。

「これこそが完璧なHappy Endingなんて、押しつけがましいかな」

Charaはもしかしたらボクが死んだことを悲しんでくれるかもしれない。傷ができていたことを知っていながら何もしてこなかったこんな無能が死んで、Charaはどう思ったのだろうか。

Asriel達Dremur家は悲しんでくれたんだろ。もつともこれ死が計画されていたとされる証拠は残してないから大丈夫だろうけど。

ところで…と自分の内側に言葉をかける。

「いつまでボクを覗いているつもり？ もうここに臨むものはないはずだよ。というかボクの中から物を見るのをやめてくれないかな」

Bellは体を突き破って内側にある存在を掴んで追い出した。

追い出された存在はBellの近くに浮遊し続ける。

「これも入れ物…：どれだけ遠くから見ているのか」

自分の周りを浮遊し続ける物質を見て呆れるようにBellはため息をついて、改めてこちらを見る。

「これは警告だ。間違ってもCharaたちの幸福を邪魔するな」

白銀に輝く瞳が溶ける。

「ボクはまだ抱いているんだ。Chara達の幸福を守るっていう作られたものじゃない、本物のケツイを」

瞳に続いて体も溶ける。

「君達がなおも観測を続けようとあがくって言うのなら——」

世界が白と黒に染まる。溶けた瞳で見定められる。溶けた瞳に輝く白銀の焰がともる。

「B a s t a r d s l i k e y o u . . .」

後 悔 の 海 に 沈 む が i n R E G R E T .」

「\* B e l l i s f i l l e d w i t h D e t e r m i n a t i o n .」

「\* B e l l i s f i l l e d w i t h D e t e r m i n a t i o n .」

「\* B e l l i s f i l l e d w i t h D e t e r m i n a t i o n a n d o v e r

「間違つても二度と戻つてこられないように、この器だつて破壊する」

本来ケツイに耐えられるはずの器が溶けて原型が無くなつていく。

k a n s o k u を き ら れ r u .

「——」

[\*  
E  
r  
r  
o  
r.  
]

[\*  
E  
r  
r  
o  
r.  
]

[\*  
E  
r  
r  
o  
r.  
]



[\*  
t  
h  
i  
s  
  
s  
h  
o  
r  
t  
  
s  
t  
o  
r  
y  
  
i  
s  
  
t  
h  
e  
  
e  
n  
d.  
.]

## 裏設定とかいろいろ

このSSの世界のキャラクター

Asriel

♂。ぐう聖。天使。かわいい。

もふもふして癒し力がとても高い。

装備は木の棒とハートのロケット（金色）。

Chara

♀。悪戯好きだが普通の少女。自己評価が低い（周りに言われ続けた罵倒による後天性）

体には消えかけている傷があつたりする。

ソウルの色は赤。

装備は本物のナイフとハートのロケット（メタリックな赤色）。

最高にカッコイイしかない（一番大事）

Toriel

みんなのママ。名前しか出ず、セリフも一切なかった。

A s g o r e

かわいそうな王様。扱いは妻とおなじだった。作者はただひたすらにA s g o r eがBGMに合わせてタオルとある個所をこする動画を見てからまともに見れなくなった。あとその動画のせいでせつかくの神イントロが台無しになった（因果応報）

W・D・Gaster

研究者。ちゃんと約束（本人的には契約）を守った。ケツイについての研究は結構進んだ。なお作中ではちゃんとした言語で話した模様。

当然ケツイ抽出装置は作られたのでこの地下世界ではC h a r aではなくB e l lのケツイを用いてA m a l g a m a t e sが作られることになるだろう。

B e l l

オリキヤラ。性別不明。T r u e e n dに入ってからようやく自分が模造品だと気づいた。C h a r aを助けることが存在意義のために大分人として歪んでる。体は比較的弱いが、運動はできる。

体の弱さは異物を感じた世界がB e l lの影響を抑えるためにそう歪めた。

ソウルは光を乱反射するクリアな色。本来ならばただの無色透明なソウルであるはずだったが、本物のケツイが宿った結果として色が付いた。ちなみに死んでソウルが体

から出たのは本来のソウルでないため体との繋がりが弱かったから。

模造品であるがためにケツイはCharraやFriskと比べて弱いため、セーブもロードもリセットもできない。

一応はニンゲンの肉体をしているが、死体であるために強大すぎるケツイを抱けば体は崩壊する。(モンスターよりかは耐久性がある)

ケツイの過剰供給時は瞳から溶け出し、白銀の焰がともる。もし戦う場合は溶けた体を使って攻撃をしてくる(HP最大値を減らしての攻撃)だろう。攻撃してソウルを砕いても無理やりくつつけられる(HP最大値は下がる)鬼畜使用。攻撃を避け続けて体を全部使わせるまで待つか復活させ続けてHP最大値を0にするかしかない。はつきり言つてクソゲーになる。

装備は破れたバグ(持ち物枠が2つ増える)とハートのロケット(銀色)。

名前の意味は祝いの鐘。あとABCトリオにしたかった。

第1話の伝説が原文と違った理由

OPの落ちた子供のボーダーが1本なのと、G√でNewhomeのカレンダーを調べた時の描写から201X年はCharraの落ちた年であると考えたため少し変更した。あと201X年って明らかにフリーズとしておかしいからってのと、子供の記憶のため内容が曖昧だったものをCharraなりの解釈で原文らしい形にしたものである

為。

前書き、後書きについて

日本語の方は F r i s k をイメージ。英語の方は S a n s。斜体で取り消し線のついでいた理由は下の方に。

True end について

B e l l のいた場所は生と死、あるいは T i m e 世界線の狭間。G√時の C h a r a のいた場所と似てるだけで別の場所。そこにいた B e l l は役割としてではなく、自分の意志、ケツイに従って審判者となった。それすらも作者に仕組まれたものだとあの子は知らない。

審判を受ける対象は B e e の存在した世界を覗いていた存在全て。ただ前書き後書きに書かれていた世界よりも S S として覗いている存在の方が多かったため、そちらに向けた言葉になった。誰よりも審判を受けるべきは作者なのにな。

この S S で出てきたの英文（一部）

サブタイトルは特別な翻訳なし。単純な英文だからそのまま翻訳してもいいと思う。前書き後書きなんかは一応訳は置いておくが参考程度で o k。むしろ違う解釈を教えてください。よりイイのあったらそつちを推したい。

タイトル

Who was SAVE? 訳：誰が救われた？

前書き

まんま。ただし「…」の後は想像にお任せ。

第1話 Who was fallen? 誰が落ちた？

Is that true? 訳：ほんとうにそうか？

第2話 A new family member 新しいうちの家族のメンバー

Really? 訳：マジなのか？

第3話 They are moving みんな引っ越し

This is beginning of the ■■■ 訳：ここが■■■の

始まりだ。(個人的にはここがターニングポイントだな。の方が好き)

第4話 Planning file 計画失敗

It was late. 訳：そいつはもう遅いな。

第5話 Secret is uncovered 秘密が明らかになる

I can not say anything. 訳：オイラはなにも言わない

ぜ。

I don't know. 訳：(オイラが)知るかよ。

第6話 *Bellis* は…

What we said; 訳：なにか言つたところで…

Heh, it's too late. 訳：へッ、今更遅いつての。

第7話 *The end*

Hey kid. Return. 訳：おいガキ、戻るぞ。

Do whatever you want. I'm go back home

e. 訳：好きにしろ。オイラは帰るからな。

第8話 *True end*

What did you say? 訳：なんて言つた?

Hah: It's so funny joke. 訳：ハハ…。そいつは随分

と笑える冗談だな……。

本文に出たやつ

「Bastards like you: have to SINKING in

REGRET」

言つてる時はこんな感じかな？なおルビは《あんたらみたいなのは…後悔の海に沈むがいいさ。》だが直訳では《あなたのようなくでなしは後悔しなければなりません。》に

なる。

Sansの「Kids like you. . . Should be burnin  
g in hell.」的なのにしたくてない頭をひねって頑張った。”Should  
be”だと「くするはずだ」という直訳になるので、もつと子供らしく直接的にした  
かったため”Have to”で「くする必要がある」に変更。

一部大文字はStory ShiftのCharaから。Bad time tr  
ioカッコいいよね。

I am filled with Determination. とかのは大体  
ルビの通りでいい。

### このSSの地下世界

Under taleの世界線で幽霊のような存在だった（多分意識だけの存在とかそ  
ういうの）Charaと対話しながらP√へ行ったRiskだが、エンディング終了  
時にCharaが消えてしまう（Riskの自意識がはつきりと固まったため追い出  
されて消滅？）



そんな経験を得てFriskがAlphysやSans達の協力を得てタイムマシンを作成、自然死（寿命などでの死）したニンゲンの死体に疑似ソウルのようなモノを突っ込んでできたニンゲン擬きをCharaを救うため過去に入れたというもの。

ただしこの時、ニンゲン擬きが過去へ着いた時点で未来が変わるため、タイムラインがFriskのいたものから分岐する（世界線が変わる）ことになる。そのためニンゲン擬きが入った時点で縁のあるChara視点でしか見ることができなくなった。

Chara達を覗いていたのはBeaの視点の中に埋め込まれた機械をアンカーとして信号を受信していた。本来ならBea視点になる予定だったようだ。

タイムマシン作ったほうのキャラクター達

Chara

♀。やっぱり最高にかっこいいしかわいい。

意識だけの存在だったがFriskに憑依するような形で同棲（体の主導権はFrisk）。P√を経て自意識がはつきりしたFriskの肉体に居られなくなり、消滅。

世界線が変わったためにSAVEされない一番の被害者。

Frisk

♀。ぐう聖。天使。かわいい。

Charraと百合百合しつつ一緒に地下を回っていた。Charraの過去を聞いてから、他のモンスターののようにCharraもSAVEしたいとケツイ。その後研究者たちとタイムマシンを作成して作られたBellを過去へと送る。因みに名付け主はこの子。Bellが死体であることは知らず、協力してくれる被験者として紹介された。そのためTrue endではSAN値がかなり減った。ついでにLOVEも上がったかもしれない。

前書き、後書きの日本語を喋ってた。

Sans

♂。カツコいい骨。ツクテーンはやる。

Friskに頼み込まれて断り続けるがケツイの固さに負けて研究者に戻りタイムマシンを作成。タイムラインについても結構ちゃんとしたので割と満足。

疑似ソウルは亡きGasterの遺品かもしれない。けど死体使うって決めたのはこいつ。あまりFrisk以外のニンゲンを信用していない。

前書き、後書きの英語の方。斜体で取り消し線が付いていたのはPlayerとの縁<sup>※</sup>がほぼぼぼないため。しかし縁<sup>※</sup>の強いFriskへの言葉なので一応描写はされた。

Torielに頼まれたのもあつてFriskのセコムになつてる。

Bellが自分のことに気づいてから内心Friskが気づかないかと焦りまくつ

てた骨。SAN値を結構持っていかれた。

Alphys

名前だけの登場（しかもこの話だけ）

Charaたちの未来がハッピーエンドに終わるのかをあなたが完璧に知る手段はない。妄想するか創作を書くしかないようだ……。

「\*あなたはこの物語のあり得たかもしれない別の未来を想像し、ケツイに満たされた。」

「I say "don't look", right? I'm very an

「GO  
BACK  
JUST  
NOW!  
AND  
DON'T  
RETURN!!  
」  
gry. . .  
」

UNDERBELL & the another story

分岐条件

UNDERTALEと同じ行動をChara及びAsrielが行う。(Bellが二人を止められなかった場合)

NewHomeに引きこもるためNルートの場合交流は一切ない。P√、G√での限定キャラ。

一周目P√

(時系列的にはAsriel戦のすぐあと)

「\*後ろの扉から人影が伸びる。」

「そんな…Bell…。どうして、出てきたの?」

「Asriel… Why don't you use my soul…?」

「\*唯一取り込まれなかったニンゲンだ。」

「う、あ……」

「\*Asrielは狼狽えている。」

「You receive my soul:」

You don't back flower, right?

「Bell: no: no:」

「\*Bellのケツイは固い。」

「Please:」

I don't want to be alone again.

「Bell:」

「\*RESET」

二周目G√

(Sans戦後、セーブは直前で強制的にされる)

「Howdy. I meet you again, right?」

「\*Bell is remember before.」

「hah:: Ignore it? So being tough.」

「\*Bell is so: idiot. Cause is smiling.」  
 「You look like: wanna have the wasted  
 time. 《あんたは、無駄な一時を過ごしたいみたいだね》」

「\*Bell is filled with Determination and you are filled with Determination too.」

「ah:: so: It's a better day outside.」

「\*Bell is filled with Determination.」

「Doesn't hear those voice,」

「flower」 is crying.」

「\*Bell is filled with Determination.」

「On the days like these,」

「\*Bell is filled with Determination and

d overflows.」

「Bastards like you:」

Should be SINKING in REGRET.」

後悔

の海

に沈む

が

後悔

を





「\*Bell filled with Determination and overflows.」

「Let's take "FIGHT",  
DIRTY KILLING MACHINE!!」

「I remember timeline at all 《ボクはこれまでのタイムラインを全部覚えてるんだ。》。— So you don't need my "MARCY" 《キミにはボクからの"MARCY"なんて必要ない》 Right?」

「Hah... that's right.」

「\*Keep "FIGHT".」  
Don't let me attack that face...」



「\*LOVEが上がった！」

## RIDERTALEー予告ー

「じゃあ、始めよう」

「F r i s k、少しは付き合わされる身にもなつてよね」

「まあまあ、C h a r a ってばそんなこと言わなくていいでしょ。ほら、構えて」

「なんでニンゲンはこの状況で騒げるの……」

「へへ：王子サマでもこれには圧倒されるのか。とはいえさすがにこの数はオイラも骨が折れるかもな。スケルトンだけに」

辺りには見渡す限りの敵の陰。その中心にいながらその5つの陰は背中を合わせ円陣を組んでいた。

多少の不安が見える顔ぶれはあれど、そこに恐怖なんてものはまるでない。この人数が集まれば絶対に勝てると、全員が信用しあっている。

『G R E A T ! A L L M A R C Y ! 』

『B O T T L E Z U B A N ! C R O S S — Z K N I F E ! 』

『D E T E R M I N A T I O N J E L L Y 』

『M O N S T E R S O U L E V O L U T I O N ! 』

## 『DANGER SKELTON』

「『変身!』」

5つの影が打ち合わせなんてしていないにも関わらずにはつきりと声を揃えてそう口にする。

変化はすぐに表れる。

全体的に白く、カラフルなラインが描かれる戦士が、手にナイフを持った赤い瞳を持つ戦士が、胸にケツイを抱いた戦士が、白を中心にあしらい、六色に分かれる戦士が、伝承にしか現れないような青い炎を燃やすスケルトンとなった戦士が。

それぞれ、姿を現したのだ。

彼らこそ、ヒーローである。

その名も……仮面ライダー。

あるいはありとあらゆる存在を助けるために。

あるいは殺戮を許さぬがために。

あるいは戦いに身を投じる友を想って。

あるいは自らの国の未来のために。

あるいは託されたものの願いを背負って。

それぞれの考えがあれど、全ては誰かの為に戦い続ける。

「…………ボクじゃ、ここまでが限界か」

戦士である以上、当然あり得ることだ。

「ごめん、Chara。約束破るよ」

『DETERMINATION WAVE!』

ARE YOU READY? ケツイは決まったのか? そう問いかける音声<sup>か?</sup>が鳴り響く。

「——できてるよ」

『ケツイ充填! DETERMINATION WAVE!! ザバザバザバザッ

バーン!』

最初に戦いに身を投じた時点ですでにケツイは固まっている。

一片の揺るぎもなく。

「ケツイを抱いて…………ブツ潰す」

戦いの後に残るのは何もない。

「ごめん、これ届けてくれる？」

「……………」

「後悔なんて、しても、したりない…な」

「……助けた、わけじゃないから」

「いつだって、最後にはそうなるに決まっている。」

「へへ……まあ、こうなるよな」

「ただ、戦いに身を投じれば早まる。ただそれだけ。」

「じゃあ、後は任せませ」

「そうして、戦士たちの想いは継がれる。」

「——最初で最後の、戦いを始めよう」

「——託されたんだ。絶対に、負けない」

”RIDERTALE” 近日公開!  
するはずがない。



## Pルート

### 分岐条件

前にも書いた気がするが、一応。チャートとしては

過去に着いた時点で幸運クリティカル（地上シーンの行動制限がなくなる上に視聴用の機械がぶつ壊れる。失敗だと半分、ファンブルだと更に半分）

Charaの好感度を上げまくる（足りないところの先で強制的にソウルを求められる）

地下でのChara及びAsrielへの説得でのクリティカル（Pであれば普通に暮らしてればよし）

以上がP、Gルートの共通チャートになります。

当然何か狂えば強制Nルートなのでクリティカル失敗したら即刻リセしましょう。

あ、元の世界ごとですよ？

じゃないとBeerleyだけちやんと覚えてるってことになりますからね。そこは本当に注意しましょう。チャートが狂います（5敗）

——Bellは、Charaに復讐を諦めるように説得した。

途中からAsrielも加わり、二人でCharaを抱きとめることでCharaの知らない愛情を与えることにした。

「……………、わかった。二人がいるなら、私は諦めるよ」

手に持っていた花を手放して、Charaも二人の背へ腕を回して抱き返す。

その日、三人は本当の意味で家族になった。これまで少し距離を置いていたBellも歩み寄るようになり、非常に仲睦まじく暮らしていくのだ。

「\*Bell is lost the Determination」

---

それから時がたち、9人目のニンゲンが落ちてくる。

出迎えてくれるのは金色の花の絨毯と、それを見に歩いてきたニンゲン2人とモンスターが1人。

「……………?」

「「Howdy!」」

「……………」

声を揃えて落ちてきたニンゲンに声をかけるが反応はない。

そのことに三人組はひそひそと流行が終わってしまったのではないか、などと相談するが傍から見たら可笑しな行動でしかない。

けれど、これができるのもすべて三人が本当に家族になったからだ。

「あー、えつと…じゃあ、改めて。ボクはBelle」

「僕はAsriel！ この地下世界の王子様プリンセスなんだよ！」

「君みたいな泣き虫じゃ、あの隊長は付いてこなさそうだけど…つと。私はChara。よろしく」

僕は泣き虫じゃない、というAsrielの講義を無視してCharaはニンゲンに手を差し出す。

それを見ていた二人はまたかという顔をするが落ちてきたニンゲンは気づかない。グチュツ、文字にするとそう形容するほかない音が響いた。

ニンゲンは気持ちの悪いものを掴んだように顔を歪めている。それをみてCharaは盛大に笑う。見ていた二人も仕方ないとも言いたげな様子ではあるが、笑っている。

「ふふ、中にスライムの入った袋を仕込んであるのさ。中々画期的だろう？」

「前はスライムそのままママに怒られてたよね」

「うん。まだあきらめてなかったんだね」

順にCara、Bell、Asrielの順である。ついにBellもToriel、Asgoreを親として認めてママ、パパと呼ぶようになっていた。

二人の言葉にCharaはほんの少し顔を赤くしながら講義しているが、Asrielは少し怯え、逆にBellは言葉巧みに飄々と躲している。

「ところで落ちてきたニンゲンの案内が必要じゃないかな？」

「……………帰ったら覚えてなよ」

「ハハ」

「ね、ねえ…落ちてきたニンゲン、いないんだけど」

遺跡の中に素っ頓狂なニンゲンの叫びが二つ響いた。

落ちてきたニンゲンはその後Bell以降に落ちてきた6人のニンゲンによって地下世界を案内されました。ちゃんちゃん。

「\*Do you take the "TRUE R  
ESET"?」

………本当に来ちゃったんだね。まあ、しょうがないか。キミたちってのは好奇心の塊だもんね。けど、後で後悔しないでよ？

## 分岐条件及びチャート

過去に着いた時点で幸運クリティカル（地上シートの行動制限がなくなる上に視聴用の機械が壊れる。失敗だと行動時間半分、ファンブルだと更に半分）

Charaの好感度を上げまくる（足りないところの先で強制的にソウルを求められる）

地下でのChara及びAsrielへの説得でのクリティカル（■■■■なのでこの後行動が必要）

以上がチャートになります。

当然何か狂えば強制▲ルートなのでクリティカル失敗したら即刻●せしましょう。前も言ったけれど、元の世界ごと。

じゃないとBeelだけちやんと覚えてるってことになりまままま。そこは本当に注意■しましょう。■ル■トの内容が本気の皆殺しになりkねませn（リセするたび

に5%確率上昇)

—— Bellは、Chararaに復讐を諦めるように説得した。

途中からAsrielも加わり、AsrielがChararaを抱きとめることでChararaの知らない愛情を与えることにした。

「……………、わかった。私は諦めるよ」

手に持っていた花を手放して、ChararaもAsrielの背へ腕を回して抱き返す。

Bellは少し離れたところからそれを見ていた。互いを幸せにするために努力するであろう二人を見て、邪魔者を消すケツイに満たされる。

「\*Bell is filled with Determination.」

それから、いくばくかの時が流れた。ニンゲンがこれまでに6人落ちてきたが、その全員が何かしらの事故で亡くなってしまった。

死体はすべてNewHome近くの棺桶に入れられて、保管されている。

忍耐の心を持ったニンゲンは体中傷だらけだった。勇気を心に秘めたニンゲンは川で溺れたらしかかった。誠実な心を体現したニンゲンは心臓に穴が開いていた。不屈の心を貫いた少年は首が裂かれていた。親切な心をしたニンゲンは自分で死んだそうだと正義の心を抱いたニンゲンは見られる姿ではなかった。

全員、どこからかBellがNewHomeへ運んできて、棺桶を作つて中に入れた。死んだ同族(ニンゲン)を運び、棺桶に入れる。その行動を度々繰り返すようになって、Bellはあまり話さなくなつた。CharaやAsrielが話しかけても気が付けばフラリと消えていた。

いつの間にか消えた、そうとしか考えられないほどにBellはいなくなるのが上手かつたし、二人もまたか、で済ませていた。

Bellは一人で生い茂る木の中の一つの枝に座り込んで、いつもHomeへと続く扉を見つめていた。見張りの仕事をしているわけでもないのに、いつだってそこを見ていた。

そしてニンゲンが現れると決まって一番に話しかけていた。

この日もまた、BellはHomeへ続く扉を見つめていた。そしてBellの座つ



ている枝の大本である木の傍に影が差す。

「Hey kid. Why are you doing? 《なあガキンチョ。なんだってそんなことしてるんだ?》」

「Sansか。……………さて、ね」

じっくりと考えてから出てくるのはどうしようもない誤魔化しの言葉。しかし、いつもなら手を引くSansもなぜだか今日は引かなかつた。

「I know your” L. O. V. E.” You know this meaning, right? 《オイラはあんたの” L. O. V. E.”を知っている。この意味…分かるよな?》」

「なんでL. O. V. E. ができるのかは聞かないけど…。うん、もちろんわかるよ」  
Sansは青く輝く瞳をBellに向けているが、それでもBellの態度は変わらない。

「もし、」

言い終えたはずのBellが話し始めてSansは思わず一層警戒を深めて睨みつける。けれどその語り口に揺らぎはない。

「もし、7つのニンゲンのソウルを手に入れることができたならモンスターは神に等しい力を得られる」

それは、最近の学術で発表された事柄であり、その道について学んでいれば誰でも知っていることだった。

「神に等しければ、当然バリアだって壊せるし、なんなら世界を作り直せる」

そこまでは誰も言っていない。けれど妙な説得力があるとSansの頭が訴えかける。危険だと本能が叫ぶが、攻撃はできなかった。

「今までに集めたソウルは6つ。……Charaが悲しむからそうしていいだけで、別にボクのを使っても構わないんだ」

「Heh…: now understand what say you…: you are crazy. 《ハッ…:なるほどそういうことか。……あんた、狂ってるな。》」

「ハハ…:理解はしてるさ。けど、ボクの目的はCharaの幸せだからね」

苦笑いしながらBellは言葉を返す。その顔が演技であるようには見えない。もしかしたら、そんな考えがSansの頭に浮かぶ。だが、BellのL. O. V. E. が上がっているのも事実だ。

「Okay, I only say to you…: Do you wanna have a bad time? 《そうかよ。『オレと最悪な一時を過ごす気はあるのか?』…:とだけ言っておくぜ》」

「ハハ…。ないよ、そんなつもりは。あり得るのはボクがCharaの役に立つための『最高の一時』だからね」

「Ah…: I, m s o l a t e .」

Bellはその言葉に笑いかけるだけだ。すでに、目的は果たされているのだ。

あとはもう一つ手に入れば自分もCharaの幸せを見ていられるというだけ。手に入らなくとも、Bell自身が『そうなる』だけ。最終的にCharaが幸せになれることには変わりはない。

「アハハ、アハハハハハハハハハハ！ こんなにも薄汚いニンゲンなんかのソウルであれほどに綺麗なCharaが救われるなんて、本当、世の中って面白いよね」

Sansはもうすでにその場にはいない。残されたのはどうしようもなく狂ったニンゲンの笑い声だけだ。

ほんとにほんとの作者さんの独り言（見たくない人は見なくてよし）

安定しないルビ

英文を「」に入れてルビ入れると表示されたりされなかつたりして……

ぐぬぬ、「」が悪さをしているのか？

でも今更変えるのもなあ……って感じ

わざわざアンケートとった理由及びなぜGルートを投稿したのか

アンケートは投稿する順番を決めるためのもの。

AUが1番ならAUが真っ先になった。（P、Gに影響なし）

PとGは投票数の多いものが先。ただし両方とも2桁に突入したら同時投稿にする予定だった。

このP、Gだが、Gの方が投票数が多ければGルートが先になり、その後のPルートは原作で言うところのソウルレスルートに進む予定で、実際に書いてありました。ボツになったので消しましたが。

一応軽く差異点を上げると「\*Bell is ( ) Determinina

tion」のカッコの中身が変わってます。カラータグとか他にもあるけど基本はそんな感じ。

Pではlost、Gではfilled with、ソウルレスではbe broke nになります。

そんでそのカッコの中身を元に先を書いて行った感じですね。

あ、一応チャートも変わってましたね。

ソウルレスでは「リセットを押してから今度は流れに身を任せましょう」ってなる予定でした。

本文の流れ？

それを知りたい人はよっぼど好奇心旺盛なんだね。

でも残念、教えることはできないよ。なにせ存在しないルートなんだからね。

ーこの場をお借りしてー

このSSに評価をつけて下さった御二方、本当にありがとうございます。特に星10の評価を下さった『行方不明者X』様は同じくUNDERTALEのSSを投稿しております。自分も自信を持って星10を押すくらいには素晴らしい作品を書いていらっしゃると思いますので、これをご覧の皆様もお読みになつてみては如何でしょうか

おうとしたんですけど考えてみたら「言われるまでもなく見た」って人しかいなさそう  
だつて行き当たりましたなんかごめんなさい。

えつと……質問あればなんでもどうぞ。感想欄でもメッセージでも、答えようと思  
います。

……綺麗な感じで終わらせておいてなんだけど、実はあと400文字ほど書かない  
と投稿することが出来ないんだ。いや、この文もあるから正確にはもう少し少なくて  
……つて、こんなこと書いてたらいつまで経つても終わらないか。

とにかく、あと300文字程度、付き合う必要はないから、ブラウザバックしてな。

なんで見に来るかな……いや、もう本当に何も無いんだって。ソウルレスルートはバックアップも取ってないから大まかな流れくらいしか覚えてないんだよ。

あ、戻ってこの場をお借りしてを書いてたら超えたわ。  
じゃ、読んでくれてありがとうね！







……おいおい、ここまで見に来たのかい？残念だけど、これは作者が悪ふざけで改行しまくっただけだぜ？

その証拠にこの下には意味の無くなったアンケートがあるだろう？

バカだね、キミは。「何も無い」って言ったし、別れの挨拶もしたのに態々スクロールするなんてさ。

まあ、そこまで深読みさせる「何か」がこんな作者にあるって言うてくれるのなら、それは嬉しいんだけどね……。

ああ、余計な事だったよね。ごめん。それじゃ、今度こそ。

ここまで読んでくれてありがとう。騙すような真似をして本当にごめんなさい。

Story Shift ( What the meaning of "Bell" ? )

これは、ありえたかもしれない並行世界A l t e r n a t e U n i v e r s eの物語。  
間違っても、同一視なんてしてはいけない世界。

独り、木の上でBellは白い息を吐いていた。そこに大きな意味はない。ただいつも通りにそこにいるだけだ。

この世界は、Bellの本来の世界ではない。そのことには誰よりもBellが気が付いていた。だからこそ誰にも気づかれることなく、しかし監視のできるそこで一日を過ごしていた。

どうやら、この世界ではBellの世界とはモンスターたちの歩みが大きく違っている。もつとも、その性格までは変わっていないようだが。

しかしなによりも大きな差異点は……。

「やあヒューマン。そんなところでなにをしてるんだい？」

「……………別に、何も」

「それじゃあこつちに来て一緒に遊ぶのはどうかな?」

「……………」

目の前にいる紛い物だ。目の前にいるコイツはCharaDreamurrを名乗っている。いや、実際にこの世界でもそうなのだ。

しかし違う。目の前にいるこの存在はこの世界のCharaDreamurrであつてBellの知るCharaではない。

確かに性格は同じだ。AsrielDreamurrと仲良くしていることだつて同じだ。けれどすべてが違う。

気にするべきではない細かな違い。よく似ているだけその違いが際立ってしまう。だからこそBellは目の前の存在を許すことができないでいた。

「あーあ。せつかく見つけたヒューマン同族なのに……………」

「……………」

Bellがどれだけ雑に扱つてもこの世界のCharaDreamurrは依然として仲良くしてこようとする。

この世界のCharaDreamurrはすでに幸せだ。だからBellの出る幕はない。出てはいけない。

へたにBellが手を加えて、そのせいでCharaDreamurrという存在が不幸になることはあつてはいけない。当然の摂理だ。

「幸せな存在を幸せにすることはできないんだから……」

「ん？ 何か言つた？」

「……何でもない。早くいかないと弟クンが心配するんじゃないか」

「それもそうだね。次は来てもらうからねー！」

それだけを言い残してCharaDreamurrは颯爽と走り去つていく。きつと弟クンの……AsrielDreamurrの言葉に顔を赤くしながらも遊んで、遊びつくすのだろう。

その中にBellは入つてはいけない。今のBellはBellDreamurrではない。ただのBellだ。

「辛い……わけがないよね」

だつてCharaDreamurrは幸せに暮らしているんだから。

そう呟く言葉はどうしようもなく自分に向けられたものだ。

すでに姿の見えないCharaDreamurrにその言葉は届かない。届く可能性があるのはかの遺跡に続く扉を開いて出てきた塵まみれのニンゲンヒトだけ。

Bellはその存在の前に今日も立ちふさがる。この世界に行きついてしまつてか

ら何度目かは忘れた。数えるだけ無駄だから。そうしてまた、決まり文句を言っ出てきたソイツを殺す。

「やあ。いい加減L.O.V.E.このルールは諦めたら？」

Bellがこの世界でDreemur夢見者と成れたのは一度だけ。それ以降のこの世界では、ずっとBell警鐘のままだ。

## Amalgamates

ソレは薄く目を開いた。しかし目に光が入ってくることはない。そこは完全な暗闇で支配されていて、絶対に出ることはないのだから。

何か夢を見ていたソレは目をこすり、体を伸ばして起こす。

ヒトの形をしたソレは、ニンゲンではない。

ケツイと塵によって創られたReal<sup>本</sup>Monst<sup>物</sup>erだ。しかしソレは他と違いより多くのケツイを注がれた。そのせいでニンゲンであつた頃のケツイの欠片が、ソレをソレたらしめている。

Name<sup>名</sup>les、Mean<sup>意</sup>ing<sup>味</sup>les、しかしそれは確かに存在している。

そうして、人ならざる者は声を上げる。言葉として意味をなさないソレの言葉は、しかし確実に響いている。

そのときふと一筋の光が差し込んだ。この場所は他ならぬソレ自身がかつて創り上げた秘密基地だ。本来ならば絶対に人は来ないはずだ。

ソレは、少ししてから光の方へ顔を向ける。元の体から大きくかけ離れたその体も、

これまでの無駄に長い時間で慣れ切ってしまっている。けれどこのところは体を動かさずにと眠っていたせいで体はなまりきってしまっていた。

もう一度、声を上げる。けれど光の先にいる何かにとつてその声は意味をなさないただの音だ。

だからこそ、音の聞こえた方へ向かう。向かってしまう。

光の先から現れたのはニンゲンだった。縞模様を着た子供だ。

しかしソレにはもうまともな視力は残っていないかった。見えるのは白と黒で塗り分けられただけの世界をソレは見ていた。

ソレは確かに歓喜した。

—— かつての理由だ。

—— 存在する理由だ。

けれどソレに未だに名前はない。けれど意味は思い出すことができた。守ることだ。目の前にいる子供の幸せを。

遠い昔に知って、未だに忘れていない名前をろくに動かせない喉で発声する。静かに



這いずり、光を受けて銀色の瞳が確かに輝く。

銀色の瞳にまたケツイが灯る。姿が改めて映し出される。ヒトの形をして、頭には三角形の耳があり、ニンゲンでの尾てい骨に当たる位置からちよろちよると動く尻尾が生えていた。

——さて、シリアスだつて？ そんなの お断りだ！

有り体に言おう。ソレとはBeierである。そしてBeierにはネコミミとネコのしっぽが生え、まさに獣人ともいえる姿になっていた。

「うー！ うー！」

Beierはニンゲンに甘えるように飛びつき、すりすりと頬をこすり合わせる。そうされているニンゲンは困ったように笑って、ゆらりゆらりと上機嫌に揺れるしっぽを思い切り掴む。

「フニユツ?!?!」

ピンと体を硬直させてBeierは離れる。耳は倒れ、しっぽも心なしか元気が無いように見える。

それを確かめたニンゲンは薄く笑みを浮かべて頭を撫でる。Beierはゴロゴロと喉をならして上機嫌になっていく。

ニンゲンは確かに笑っている。

けれど、その体は逆光になっていて陰でしか判別できない。Beerもまた、モノク  
ロの世界にいるせいでそのニンゲンを判別することはできない。

確かにそこにいるのはニンゲンだ。ただしBeerの求めるその存在ではない可能性もある。すべては確かな観測をするまでわからない事実であり、確かめる術のない話だ。

ニンゲンはBeerが微睡に囚われたことを確認してから外に出て、また扉を閉める。こうしてBeerは再び眠りにつく。次に目覚めるのは果たしていつになるのだろうか。

# U n d e r S w a p ! 「 s w a p p i n g t h e w o r l d : ( ) 」

ふう、と息を吐き出す。

別に疲れるようなことをしたわけじゃない。ただ少し困った。それだけだった。ボクは真つ暗な空間に座り込んでその画面を見ている。

完全なまでの真つ暗闇。その中で見えるのは彼女の視界だけ。そのくせ後ろから十ニカに見られている感覚が付きまとう。

正確には、見られているのはボクじゃない。けれどこの感覚はボクにだけ襲っているようだ。そのせいで誰かに言うこともできず、途方に暮れる。

「まあ、そもそも誰にも話しかけることなんてできないんだけどね」

へっ、と鼻で笑う。どういうわけかここにいますが、ボクはボクのままだ。しかしこの世界のみんなは入れ替わっている。Sansがなぜか弟であるはずのPapyrusのような性格になって、そのPapyrusはSansのような怠け者：怠け骨になっ  
てしまっている。

結局今の今まで何もわかってはいない。けれどこの世界はそうなんだと考えること

にした。

「ああ、またか」

仕方のないことだってことくらいわかっている。何も言わずにできる方がおかしいのだ。

ぼーっとこの暗い世界を見渡すのにも飽きていたけれど、何度もこうするのは気が滅入るといふものだ。しかしこうしなければ彼女が壊れてしまう。

「彼らはべつにどうだっかっていいだろう？ キミは悪くなんてないんだぜ？」

ハハハハ！ と大きな声で笑う。彼女は頭を押さええうずくまったようだ。そりゃあ、頭の中から耳障りな音がしたら誰だっかってそうするだろう。

そう、ボクがいるのは彼女の頭の中とでも言うべきところ。そりゃそうだ。ボクは死人なんだから、体なんてあるはずがない。

けれど……ボクのケツイが、ボクという存在が消えることを許容しなかった。

結果としてケツイだけの化け物<sup>モンスター</sup>としてボクは生き延びている。いや、死ねないでいる……と言うべきか。

ともかく、ボクにできるのは塵で汚れてしまう彼女の精神を守ることだけ。

どうしようもなく操られて、それでも情けをかけることを諦めようとしなない彼女は相  
当に決意が固い。けれどそれではやがてケツイ<sup>ケツイ</sup>を砕いてしまう。

だからボクは……ボクが、悪魔となって彼女の精神を壊れないように調整している。もう何度目かも忘れてしまったこの世界でも彼女は情けをかけようとして、それでも決して自分の意志では体を動かすことができず、ボクという存在を追い出そうとする。仕方のないことだと思おうし、実際にそうするべきなのだ。彼女の中にボクがいていいことなんて一つもない。

本来は一つの肉体には一つだけタマシイが存在しているべきなのだ。間違つても二つなんて抱えていい数じゃない。

けれどどうしようもなくボクも彼女もその点は諦めた。代わりに彼女は情けをかけることにより専念し、ボクは操ってくる奴の正体を探っている。

それはどうしようもなく遠い糸だ。細くて、けれどピンと張っている。とてもではないが、力業で追う事なんてできない。

けれどそれは今までの話だ。今は違う。今なら……ここまで時間をかけたことで今ようやく届くようになった。

「覚悟しろよ……」

彼女へ際限なく注がれることになる非情の塊<sup>EXPTLOVE</sup>。ボクが代わりに受け止め続けたおかげでボクはこうして世界の理に反さない方法で規格外と成れた。

「ボクが、直々にそこにいる君にLOVEを与えてあげるから……さ」





## M a r r y X , m a s !

「C h a r r a ! 今日はクリスマスだよ！」

A s が C h a r r a に明るく声をかける。そう言えば今日は12月25日。確かにクリスマスだ。…けどサンタの登場は昨日の夜から今日の朝にかけてのはず…地下世界では違うのかな？

そんな風にちよつと考え始めたボクとは違ってC h a r r a は冷静にA s に言葉を返していた。

「クリスマス…。ああ、もうそんな時期なのか。地下は季節が分かりづらいからな…気づかなかつたよ」

「もう！ クリスマスを忘れるような悪い子にはサンタクローズは来ないんだよ？」

「だとしたらそこで考え込んでるB e e も怪しいな」

名前を呼ばれたので顔を上げてみると二人してボクを見ている。A s は信じられない、と言いたげな瞳で。逆にC h a r r a はニヤニヤと悪戯を成功させたような笑みだ。

二人の会話をあまり聞いていなかったこともあってとりあえず首をかしげてみるが反応はない。一体何の話をしていただろうか。



しかしクリスマスとなると、Charaは怪しいがAsは未だにサンタクロースの存在を信じていそう。まさかそれを教えるわけにもいかないし、とりあえず何でもないように過ごすとしよう。

「ああ、クリスマスって言えば……………」

Charaにちよつとした手品を使ってボクからだってバレないようにプレゼントを贈ったことがあつたつけ。ボクも子供だったからチョコレートくらいしか贈れていなかったけれど、今年はもつと豪華にいききたいな。

「Beer、クリスマスがなんだって？」

「…………アハハ、思いついたことを忘れちゃった…」

「BeerってCharaみたいに変なところで抜けてるよね」

「私みたいにしてどういふことだ、As」

ワーキヤーと二人で騒ぎ始めたのをしり目にボクは考えを巡らせる。まあ、けど一先ずは…………。

「二人とも、ボクちよつとSnowdinまで出かけてくるよ」

「「いつてらっしやい！」」

プレゼントでも、買いに行こうか。

時間はかなりたって、その日の夜。

ボクは二人のベッドの傍に立っていた。三人で一緒に今日はサンタクロースをみるまで起きていようとしていたけれど、二人は早々に寄り添いながら眠ってしまった。

そんな二人を写真に残せないことを嘆きながらも、ボクは買ってきたそれをそれぞれ枕元に置く。そうして二人の頭を撫でながら一つ言葉を落とす。

「H a v e a g o o d d r e a m …」

少しくすぐったそうにする二人をもう一度だけ撫でて、ボクは自分のベッドにもぐりこむ。今日はいい夢を見ることができただろうって確信を胸に。

次の日の朝、ボクはA sの絶叫でたたき起こされた。

「C h a r a ! B e l l ! 今年はサンタクロースが二人いるの!?!」

「むう…A s、うるさい…もうちよつと寝させてよ…」

ボクよりも先に起こされたらしいC h a r aが眠たげな目をこすりながら体を起こして、そして固まる。

「今年のサンタクロースは仕事が早いな」

ぼそりと呟かれた言葉だったが、ボクにははつきりと聞こえていた。どうやら、ボクのトリックは見破られていなくて、C h a r aはずつとサンタクロースのことを信じて

いたようだ。……これから見破られないようにしなければ。

「……って、サンタクローズが二人……？」

ボクの枕元を見てみればプレゼントが一つ。……それもそうだ。どうして気付かなかったのだろう。考えてみればボクが動かなくてもママとパパが動いていたんだ。

けれど……だとしても。

「二人の笑顔を見てよかったな……」

『二人の笑顔を見て来年もまた用意するというケツイを抱いた。』……なんてね。